

ネコの食卓

4

工場ができて、島の暮らしのリズムが変わった。島の家には目覚まし時計がない。朝早く、工場に向かう娘のために、母親が夜中も時間を気にして一時間ごとに起きる。村の人みんなが寝不足で体力を消耗しているようだ。残った男たちが、急激な生活の変化への不安感から、女たちの工場勤務をやめさせようと決議した村もあつた。

南太平洋、ソロモン諸島のニュージョージア島。工場とは三年前にできた大洋漁業と現地政府の合弁会社「ソロモン大洋」の缶詰工場だ。

工場ができた島

日が沈むと寝る。人々はイモ

らボートやトラックで一、二時間。朝食は食べない人が多い。作業は五十匹の魚を処理し終わる午後五時ごろまでだが、従業員は、どこかのんびりしている。工場側は「早く終われば、早く帰れる」と能率をあげるよう呼びかけている。

浜辺にはマングローブ、陸にはヤシ。夜明けとともに起き、

現金は手に入るけど

を主食に、青菜や魚、貝を食べ暮らしていた。現金収入が欲しい時は、乾燥させたヤシの実やボタンにする貝、魚を売った。

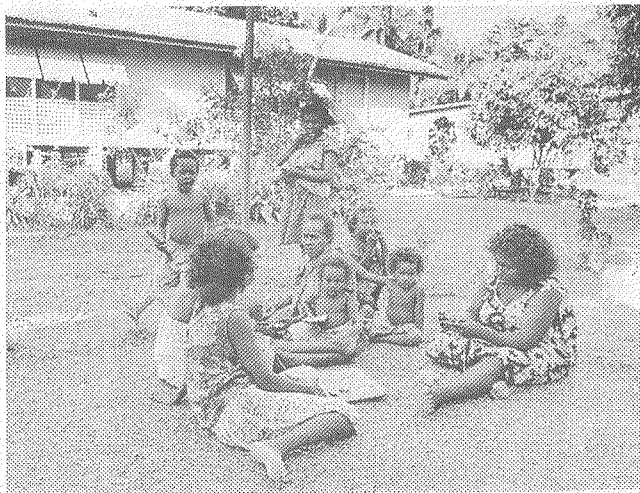
今も首都以外は半農半漁だ。しかし、米を食べるようになって、お金が必要になった。さらに洋服、せっけん、砂糖、紅

茶、そして缶詰……。出費がかさむ。

缶詰工場は現金収入と雇用の拡大を図るため、政府の政策でできた。

日は畑で働き、二日は漁をする。妻は缶詰工場で働いていたが、妊娠してやめた。が、また働きたいという。「上の子がハイスクールに行くのに、お金がかかるから」という。

大阪YWCAから太平洋教会協議会(PCC)に派遣され、



子どもをあやしたり、編み物をしたり。島は豊かで自給自足もできる

＝ソロモン諸島のニュージョージア島で

島の生活を調べた雀部真理さん(三三)は「みんな工場勤務は初めて。給料をもらっても、それが高いのか、安いのかわからない。お金のかかる生活をするようになって、栄養のバランスや生活のリズムが崩れたようです」と話す。

取れたカツオやマグロ三万七千(九一年)のうち、一万二千を人用の缶詰や荒節に処理。自身缶は輸出用で、血合い肉が中心の缶詰が地元向け。残り約三分の二は冷凍で、タイや日本、フィジーなどへ輸出される。

日系企業ソロモン大洋のカツオ一本釣りで、それに使ったまき餌(え)用に小魚を取ってしまいが、島周辺の環境の魚が減ったという。この夏、住民を代表してバエアニアさん(五三)が来日、現状をこう訴えた。「タイなどに輸出されたカツオの一部は日本のネコ用の缶詰になっている。日本ではネコが食べているのに、私たちはカツオやマグロだけでなく、環境の魚も食べることができなくなる」